

ウィトゲンシュタインの哲学観

羽地 亮 (Haji Akira)

神戸大学

ウィトゲンシュタイン哲学を「中期」と「後期」に分けることができるとすれば、「言語の自律性」が確立するまでをもって「中期」とし、そこから離脱して「行為と状況の哲学」への展開がはじまるときを「後期」とすることができるように思われる。ただし、前期哲学と中期哲学との間に鋭い境界線（十年ほどのブランク）が引かれるのに対して、中期哲学と後期哲学との間に鋭い境界線を引くことは、不可能である。ウィトゲンシュタインは、1929年2月から多くのマニュスクリプトへの書き込みを開始し、それらから断章を抽出してタイプスクリプトを作成し、訂正、削除、増補を繰り返しながら、彼自身「私の本」と称した『哲学探究』第一部をわれわれに遺した。『哲学探究』には、1929年に書かれた断章すら含まれている。それゆえ、こうした事情から、『哲学探究』はパッチワークであるという主張さえ現れている。

しかし、それは拙速の判断ではなかろうか。われわれの考察によれば、1929年から1933年頃までの断章は、有機的な連関をもち、一定のまとまりをもった一連の思想、すなわち、単なる「過渡期」ではない「中期哲学」を形成しているとみなすことができる。そして、われわれは、以下の考察において、やはり有機的な連関をもち、一定のまとまりをもった一連の思想、すなわち、単なる「パッチワーク」ではない「後期哲学」の形成を見ようとする。たとえウィトゲンシュタインが、『哲学探究』において、かなり昔の断章をそのまま転載していたとしても、彼がその断章を転載した先の文脈は、以前のマニュスクリプトやタイプスクリプトの文脈とは異なっている。文脈が異なれば、断章の意味も同じとは限らない。

「パッチワークセオリー」によれば、『哲学探究』を読んでいて分からなくなったら、より以前のバージョンに戻れ、と提案される。確かに、この戦略がうまくいく場合はある。しかし、われわれは、この戦略が読者をミスリードする可能性もまたあると主張したい。もし『哲学探究』がパッチワーク以上のものであるならば、断章をより以前の文脈に戻して読むことは、無用な誤解を呼び込む恐れがある。

ウィトゲンシュタインの遺稿が利用できるようになったからといって、彼の哲学の研究が容易になったわけでは必ずしもない。『哲学探究』を理解できない読者が、マニュスクリプトやタイプスクリプトを理解できるとは限らないであろう。『哲学探究』の解釈において、われわれがそこへと訴えるべき最終法廷は、マニュスクリプトやタイプスクリプトではない。遺稿そのものの研究が目的でない限り、遺稿はあくまで『哲学探究』読解の補助手段（『草稿 1914-1916』が『論理哲学論考』読解の補助手段であるように）であって、最終法廷は『哲学探究』そのものであると考えるべきである。『論理哲学論考』における断章の配列が重要な意味をもつと同様に、『哲学探究』における断章の配列も、それがいかに錯綜していようとも、一定の意味、意図をもつと

みなすべきではなからうか。遺稿が利用できるようになって、ウィトゲンシュタイン研究は依然として困難な道であり続けている。

ウィトゲンシュタインを読むことの難しさのよって来るところについては、すでに多くの研究者が多くのコメントを与えている。われわれは、ここで、彼の哲学を研究することの困難さの一つの側面——われわれが彼の哲学について抱いている一つの先入見——にスポットを当てたい。その側面とは、彼自身の哲学観である。彼の独特な——ある人々にとってはエキセントリックな——哲学観が、彼の著作を読むことを困難にしている、というわけである。

前期においても後期においても、ウィトゲンシュタインにとって、哲学とは、理論ではなくて活動(Tätigkeit)、思考を明晰にして哲学的問題を解消するという活動であった。こうした哲学観は、その意味するところを吟味する以前に、ある人々を強く魅了すると同時に、またある人々にとっては嫌悪感と知的不満足を引き起こすものであろう。しかしながら、ここでは差し当たり態度を留保して、ウィトゲンシュタインの哲学観の一側面に照明を当ててみたい。彼によれば、哲学とは、事柄の背後にあるものを説明して当の事柄を基礎づける科学(学問)(Wissenschaft)であるわけではない。説明を必要とするのは、事柄そのものではなく、あるオブセッションにとりつかれたわれわれなのである。ウィトゲンシュタインの哲学とは、このオブセッションを解消する活動である。その活動は、事柄を説明するのではなく、事柄をただありのままに記述することに終始する。理論や説明や仮説が提出されることはない。それゆえ、彼の論述は、その趣旨が捉えにくく、理解しにくい、というわけである。

しかしながら、われわれは、あまりにもウィトゲンシュタインの「哲学観」を額面どおり受容しすぎているのではなからうか。この点を発表のときに少し立ち入って考察したい。したがって、われわれはこう考えたい。ウィトゲンシュタインが述べる「哲学観」はこのような哲学をやりたいという理想を述べたものにすぎず、現実の自らの哲学の様態を描写しているのではない、むしろ、現実の彼の哲学は、彼の「理想」にしばしば背反している、と。現実の彼の哲学は、しばしば理論や説明や仮説を提出している。ただ単に言語ゲームの記述に甘んじているだけではない。それゆえ、彼の哲学の難しさは、少なくとも、彼の「哲学観」に起因するものではない、それはあくまで彼の著述のスタイルに起因すると考えたい。そしておそらく彼自身は、彼が行う探究そのものにも「難解さ」の責任があると付け加えるであろう。

ウィトゲンシュタイン哲学を研究するにあたって「言語ゲーム」や「家族的類似」といった言葉を説明するな」といった「金言」が、述べられることがある。確かに、こういったタームは、ウィトゲンシュタインの比喻である。そして、彼の考察の「道具」そのものを研究するより、彼がどのような哲学的問題に対してどのように対処したかを研究するほうが重要である、という指摘には傾聴すべき点がある。しかし、このような「金言」は、実は不適切な主張ではなからうか。彼の哲学を解釈するだけでなく、たとえば彼の哲学に対する批判的な視座を確保しようとする研究においては、彼がどのような概念をどのように用いたかを明らかにしない限り、そもそも批判の対象が現出してこない。発表では、この点に言及するとともに、彼の「活動」とはいかなるものかについて、哲学・科学・学問の方法論をも視野にいれながら、検討したい。